

野口 宏

中日新聞名古屋本社活性化審議室次長
(前文化部長。2006年4月から2008年7月まで分子科学研究所運営顧問)

未来を拓く基礎学術



のぐち・ひろし

1952 (昭和27)年、長野県茅野市出身。

早稲田大学第一文学部仏文科卒業。

中日新聞飯田支局、東京・中部報道部、長野支局デスク、岐阜支社報道部長などを経て、2006年3月から名古屋編集局文化部長。旧石器・縄文時代を中心とした考古学取材がライフワーク。

08年8月から名古屋本社活性化審議室次長。

趣味は登山。今夏も八ヶ岳の硫黄一横岳一赤岳一阿弥陀岳、北アルプスの白馬一小蓮華一白馬乗鞍などを歩く。

新緑がまぶしさを増す五月初旬、京都へ出掛けた。歴史探訪は好きだが、今回は寺巡りではない。京大に山中伸弥教授を訪ねたのである。皮膚などの体細胞から、神経や腸管など体のさまざまな細胞に分化できる「人工多能性幹細胞 (iPS細胞)」を作った研究者である。同じ万能細胞でも「胚性幹細胞 (ES細胞)」は、受精卵を壊して作るため倫理上の問題が指摘されるが、iPS細胞にはその心配がなく、難病の原因解明や新薬の開発、移植医療など、幅広い応用が期待されている。

訪問の目的は、山中教授に弊紙の第61回中日文化賞を贈るにあたって、正式なあいさつと贈呈式の打ち合わせをするためであった。マウスの皮膚からiPS細胞を作るのに成功したのが二年前。昨年十一月には、ヒトの皮膚で成功したと発表して世界を驚かせた山中教授は、国内外を飛び回る多忙な生活を送られている。無理を言って取材の時間をつくっていただき、京都支局の記者二人と一緒に研究室に入った。ノーベル賞に近いと言われる研究者は、どんな人物か。膨らむ好奇心とともに、緊張感も高まった。

気さくで謙虚な人柄。第一印象である。柔道二段のスポーツマンで、よく鴨川沿いの道路を走るといふ。もともと

と整形外科医だった山中教授が基礎研究に移った理由についてお聞きすると、教授は次のように話された。

「基礎的な理詰めの考え方というか基礎研究を一度やって、また臨床に戻ろうと。いったん研修医になって、このままずっと外科でやっていくと思っていたんですが、その間にちょっとだけ (基礎研究の) 考え方を身につけたいなと思いました。なかなか治らない病気がいっぱいあるのも事実で、そういうものにも基礎研究は役に立つ可能性がありますから」

臨床と基礎研究の間で揺れた時期。しっかりした基礎研究のやり方や考え方を学びたかったという研究者の情熱が伝わってきた。と同時に、山中教授が繰り返された「基礎研究」の言葉が、新鮮な響きをもって感じられた。基礎研究を選択された教授の決断が、iPS細胞作製につながったのだと思うと感慨深いではないか。

何事においても基礎は大事なのだ。私は、本筋を離れて妙に納得していた。新聞記者でも同じであると。今は、電話やインターネットでいくらでも情報を収集できる。しかし、私たちはネット情報をどこまで信用できるだろうか。やはり、基本は直接・対面取材である。取材相手の目の動きや息遣い、色、音、

臭いなど現場に立ち会わない限り、決して得られない“情報”がある。事実を、真実を客観的に伝えるには、そうした作業が不可欠なのである。若い時に比べ、取材に出ることは少なくなったが、一人の記者として「現場」を大事にする気持ちに変わりはない。

話が脱線してしまった。私が山中教授の話を伺っている時に頭に浮かんだことが、もう一つあった。それは、分子研の中村宏樹所長の言葉である。昨年十一月、上下二回にわたって弊紙の夕刊文化面に寄稿いただいた「先進文化国家・日本を築くために」。示唆に富んだ論考であった。特に印象に残っている言葉を紹介したい。『「学術研究」は技術的応用を直接の視野に置かない息の長い基礎科学の研究を意味する。それは、何十年、何百年の後に新しい科学技術を生み出す『種』となり、新しい文化の礎となるものなのである』。

私は、科学や芸術など文化の振興こそが未来を拓く力になると信じている。縁あって分子研の運営顧問を務めさせていただいているが、基礎学術研究の危機をこの国の危機ととらえている先生方が、憂国の志士、に見えたこともある。しかし、わが国の基礎学術研究への投資は先進国の中でも非常に低いレベルであると聞いた。経済至上主義

の社会にあつて、産業に直結しない研究に企業の資金は流れにくい現状もある。世の中全体が近視眼的で、懐の浅い社会になってしまっているのである。基礎学術の振興は、未来を拓く力になる——そうした視点で、私たちマスコミも報道を続けていかななくてはならないだろう。今、あらためて思うところである。

◇ ◇

何だかいかめしい。名前を聞いただけで身構えてしまいそうだ。「大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 分子科学研究所」。基礎学術研究機関としての存在は聞いていたが、活動内容などはほとんど知らず「これは、手ごわいぞ」と。それが、分子研に対する正直な印象であった。

中村宏樹所長が中日新聞社を訪ねてこられたのは、一年余り前のことである。中村所長は二〇〇〇年に「化学反応における非断熱遷移現象の研究」で、第53回中日文化賞を受賞されている。そんな縁もあって、分子研の運営顧問をお引き受けすることになった。いや、なってしまったと言った方が当たっていよう。専門を離れ、文化的視点から、事業計画や管理運営について助言するのが仕事ということだった。しかし、安請け合いは怪我のもと。中村所

長や分子研関係者の期待を裏切ってしまった気がする。良い結果を挙げるとしたら、中村所長に寄稿いただいたことと、私自身の目が基礎学術研究の重要性と分子研の現状に向けたことぐらいであろうか。

最後に、報道に身を置く者として一点だけ申し添えておきたいことがある。それは、基礎学術研究の拠点として、分子研の存在意義を広く外部にアピールし続ける必要性である。確かに、目先の利害にとらわれず、未来を見据えた真理の探究を続けることは基本であり、理想だ。しかし、それを実現させるためにも広報の充実が求められる。岡崎の分子研ではなく日本の分子研であるという自負をもち、記者会見は少なくとも愛知県庁で行うべきだろう。重要な会見については、東京と名古屋で同時開催など、より積極的な“広報活動”を期待したい。国の将来を憂える内向のエネルギーを外向のエネルギーに変え、活動状況をできる限り分かりやすくアピールしてはどうだろうか。市民、マスコミ、政治家など、分子研への理解者を増やす努力も必要だと考えるのである。